

## 新府城(国史跡, 続百名城) (韮崎市中田町中条字城山) (藤武稻荷神社)

新府城(しんぷじょう)は、現在の山梨県韮崎市中田町にかつてあった城である。1973年(昭和48年)には「新府城跡」として国の史跡に指定されており、保存のため公有地化された。本丸跡地には藤武稻荷神社が建立されている。

### 地勢と構造

甲府盆地西部に位置する。八ヶ岳の岩屑流を釜無川と塩川が侵食して形成された七里岩台地上に立地する平山城。西側は侵食崖で、東に塩川が流れる。

石垣は使われない平山城で、本曲輪・二の曲輪・東の三の曲輪・西の三の曲輪・帯曲輪などにより構成され、丸馬出し・三日月堀・枅形虎口などの防御施設を持つ。ちなみに本曲輪・二の曲輪は躑躅ヶ崎館の本曲輪・西の曲輪に相当し、規模も同程度であることから政庁機能を持つ施設と考えられる。

近年発掘作業や間伐など整備がなされ、甲州流築城術の特徴である丸馬出しや三日月堀、特徴的な鉄砲出構、その他土塁や堀跡、井戸や排水施設などの遺構が確認できるようになった。また、陶磁器類も出土している。支城として白山城・能見城がある。

勝頼期の武田家の築城の特徴として、台地の突端部(側面・背後は断崖や川)を利用し戦闘正面を限定させ、なおかつ正面からの敵の圧力を側方に流すような構造が挙げられる。具体的には、正面の丸馬出しより城側面に続く比較的深い堀を敵兵に歩かせる。横矢を掛け敵兵を攻撃すると、堀は断崖・川へと続いており、こちらへ追い落とすことにより敵兵を無力化できる。同様な構造の代表的な城に遠江では諏訪原城・小山城、信濃では大島城がある。ただし、新府城の場合は現在遺構とされる城跡ではなく、能見城を中心とする新府城北方の防塁跡にこの構造が見られ(浅野家文庫・諸国古城之図)、上に挙げた城に比べその規模の大きさは群を抜く。また能見城防塁は複雑に屈曲し、最大限横矢を掛けられるような構造となっており防塁が多数配置されている(ただし、これら北側防塁は天正壬午の乱時に徳川家が構築したものとの説あり)。

このような大規模な構造から、少なくとも数千から万単位の兵力による運用が前提となるようである。実際天正壬午の乱においては、徳川家康の北条氏直の軍に対する本陣として使用されている。

有効であったかどうかは定かではなく意見の分かれるところだが、新府城北側に2箇所ある鉄砲出構は江戸時代に築かれた洋式城郭である五稜郭の設計思想と同様の、突出部分の敵と当たる面積を抑えつつ突出部及び出構間に強力な火力を投射するためのものであると考えられる。

使用された期間は短いですが、七里岩突端部の南北7-8キロメートル、東西2キロメートルという周辺の自然地形全体が軍事的意味をもっていたことを考慮に入れば非常に大規模な城であり、武田家を代表する甲州流築城術の集大成となる城である。

### 歴史

戦国期に守護甲斐武田氏は本拠の石和(笛吹市石和町)から甲府へ進出して川田(甲府市川田町)に居館を移転した。信虎期には甲斐国内を統一し戦国大名化し、古府中に居館である躑躅ヶ崎館が築かれ、家臣団を集住させて城下町(武田城下町)を形成した。

晴信(信玄)期には領国拡張と平行して城下の整備拡張が進み、政庁としての役割を持つ府中として機能している。続く武田勝頼時代にも整備は行われているが、後背に山を持つ府中は防御に適しているものの城下町の拡大には限界があり、信濃、西上野、駿河へと拡大した武田氏の領国統治にとって不備であったため、府中の移転が企図されたと考えられている。

武田氏滅亡後に甲斐は織田氏、徳川家康と領主が変遷するが引き続き躑躅ヶ崎館が支配の拠点となっていたが、羽柴秀勝時代には城下南部の一条小山に新たに甲府城が築城され、豊臣大名時代から江戸時代にかけて整備され、新たに甲府城下町が整備された。

新府城が位置する葦崎は盆地北西端に位置しているが、戦国期に拡大した武田領国においては中枢に位置し、古府中よりも広大な城下町造営が可能であったと考えられている。また、七里岩は西側を釜無川、東側を塩川が流れ天然の堀となる要害であり、江戸時代に葦崎は甲州街道や駿州往還、佐久往還、諏訪往還などの諸道が交差し釜無川の水運（富士川水運）も利用できる交通要衝として機能していることも、新城築造の背景にあったと考えられている。

史料上の初見は、天正9年（1581年）に家臣の真田昌幸へ普請を命じたもので（「長国寺殿御事跡稿、真田宝物館所蔵文書」、天正3年（1575年）の長篠の戦い（設楽ヶ原の戦い）で織田・徳川連合軍に武田方が敗北した後、勝頼は領国支配を強化し、河内地方から織田・徳川領国と接する駿河を領する穴山信君（梅雪）が織田軍の侵攻に備えて七里岩台地上への新たな築城を進言したという。築城は天正9年（1581年）から開始され、年末には勝頼が躑躅ヶ崎館から新府城へ移住している。

天正10年（1582年）、信濃での木曾義昌の謀反を鎮圧するため諏訪へ出兵するが、織田・徳川連合軍に阻まれて帰国。織田軍はさらに甲斐国へ進軍し、勝頼は3月には小山田信茂の岩殿城に移るために、城に火をかける。勝頼は岩殿城に向かう途中で笹子峠（大月市）で信茂の謀反にあい、天目山（甲州市）へ追い詰められ武田一族は滅亡する。同年6月には京都で信長が横死し（本能寺の変）、武田遺領を巡って徳川氏と後北条氏の争奪戦（天正壬午の乱）が起これると戦略上の重要拠点となるが、後北条氏が滅亡すると廃城となった。

Wikipediaによる

新府城は、天正9年（1581）に武田勝頼によって築城されました。城は未完成でしたが、同年の9月頃には友好諸国に築城が報じられ、12月24日に躑躅ヶ崎館（武田氏館跡 山梨県甲府市）からの移転が行われました。しかし、天正10年3月3日、勝頼は織田軍侵攻を目前にして自ら城に火を放ち退去し、3月11日に田野（山梨県甲州市大和町）において、夫人と息子信勝ともに自害し、武田氏は滅亡してしまいます。

その後、同年に徳川氏と北条氏による甲斐国争奪をめぐる天正壬午の戦いがおこり、徳川家康は新府城を本陣として再利用しました。

新府城が立地する七里岩は、八ヶ岳の山体崩壊にともなう岩屑流が、西と東側を流れる釜無川と塩川の侵食によって形成された台地で、西側の断崖絶壁は葦崎から長野県の葛木（諏訪郡富士見町）まで約30キロメートル続き、奇観を呈しています。

台地上には、100を越す「流れ山」と呼ばれる小高い丘・小山があり、新府城は七里岩台地南端の標高約524メートルの「西ノ森」と呼ばれた小山に築かれ、西側は釜無川をのぞむ急崖となっています。

城は土の切り盛りによって造成が行われ、山頂の本丸を中心に、西に二の丸、南に西三の丸・東三の丸の大きな郭が配され、北から東にかけての山裾には堀と土塁で防御された帯郭がめぐり、南端には大手櫓形・丸馬出・三日月堀、北西端には搦手があり、全山にわたって諸施設が配置されています。

搦手の郭は東西100メートル、南北25メートルの東西方向に細長い長方形をしており、北側には水堀と土塁、東から南側にかけては空堀、西側は比高差90メートル程の七里岩の断崖となっています。

城の北西隅につくられている乾門は、西側が七里岩の崖、東側が水堀でこの間を土橋でわたる構造で、大手と同様に内側が大きく、外側が小さい土塁によって囲まれたやや変則的な形の櫓形虎口で、櫓形内部空間は東西約13メートル、南北約12メートルの広さがあり、外側門（一の門）は北西角、内側門（二の門）は南東隅寄りに設けられています。

葦崎市役所公式サイトによる

